

頭症と第四脳室下方に巨大な cyst と Gd-DTPA にて造影される充実性腫瘍を認めた。後頭下開頭にて充実性腫瘍は延髄背側から後方に突出し、延髄腹側に cyst を伴っていた。充実性腫瘍を摘出し、cyst を開放した。術後重篤な後遺症も無く退院した。

B-49) 巨大類上皮腫の1手術例

瀧澤 克己・佐古 和廣 (旭川医科大学)
橋詰 清隆・米増 祐吉 (脳神経外科)
高橋 光明・安達 俊秀 (耳鼻咽喉科)

症例は35歳、女性。1994年6月より歩行障害が出現、1995年10月当科に入院した。入院時、軽度左片麻痺、小脳症状を認め、MRI では脚間槽から頸静脈孔に至り、くびれをもって脳幹を強く圧排する髄液とはほぼ同信号で造影効果を示さない mass lesion を認めた。11月1日、combined transpetrosal and lateral suboccipital approach で手術を施行したが、中脳前面の腫瘍は直視下には見え、癒着も強かったため亜全摘とした。術後一過性に小脳症状の悪化を認め、術後5日目より右顔面神経麻痺、右感音性難聴が新たに出現した。保存療法で感音性難聴以外の症状は改善を示したが、術後1か月の MRI で残存腫瘍が脳幹に埋没傾向を示したため、12月18日、rt. pterional approach で再手術を施行し、腫瘍を全摘した。12月29日、右感音性難聴のみを残し自宅退院した。本症例に施行した approach 法の限界、治療方針に関して考察を加える。

B-50) 嗅神経芽腫の摘出後、2度の前頭蓋底再建を要した1例

上井 英之・溝井 和夫 (東北大学)
木内 博之・吉本 高志 (脳神経外科)
山田 敦 (同形成外科)

前頭蓋底の再建、副鼻腔との遮断には、原則として vascularized flap を使用すべきとされている。一般には pericranial flap を用いることが多いが、今回我々は、pericranial flap による再建後に感染を来とし、再手術を要した症例を経験したので報告する。

症例は47歳の女性。1994年5月、右視力低下で発症し、その後左視力低下および嗅覚低下も出現したため、同年12月、当科に入院した。入院時、両側の視力・視野障害および嗅覚脱失が認められ、CT・MRI にて前頭蓋

底から副鼻腔に進展する石灰化を伴った大きな mass が認められた。1995年1月、腫瘍摘出術および pericranial flap と split bone graft による前頭蓋底再建を行い、その後、放射線療法を施行し、同年4月に患者は独歩退院した。1996年1月、follow up MRI にて air を伴った Rt. frontal cystic mass が発見されたため、brain abscess の術前診断にて、同年2月1日、再手術を施行した。pericranial flap は split bone graft の edge により被薄化しており、この部分より頭蓋内に air が侵入したと思われた。また、腫瘍摘出後の副鼻腔に充填した脂肪組織は完全に融解し、split bone graft が直接副鼻腔に接していた。そこで、今回は、split bone graft は除去し、vascularized rectus abdominuous flap を副鼻腔に充填する形で前頭蓋底の再建を行った。術後は順調に経過し、患者は2月24日に独歩退院した。今回の症例より、広範な bone defect を有する場合の前頭蓋底再建には pericranial flap だけでは不十分で、特に死腔の大きな場合には有茎腹直筋移植の併用が必要と思われる。

B-51) テント上脳室上衣腫の1手術例 —どこまで摘出すべきか—

前田 義裕・丹羽 潤
松村 茂樹・大山 浩史 (市立函館病院)
清水 匡一 (脳神経外科)

症例は4才男児。頭部打撲精査のため行った CT で、右後頭葉内側に石灰化を伴う最大径約 3 cm の腫瘍を認めた。MRI で腫瘍実質部分はほぼ均一に増強されたが、側脳室内に進展する嚢胞壁は増強されなかった。脳血管撮影では明らかな腫瘍陰影は認めなかった。後頭葉内側より発生した嚢胞と石灰化を伴う腫瘍と診断して摘出術を行った。腹臥位で両側後頭開頭にて大脳半球間裂を分け入ると腫瘍が露出した。大脳鎌との癒着を剝離した後、腫瘍を内減圧しながら後頭葉内側面と腫瘍を剝離していくと、腫瘍は側脳室三角部で嚢胞壁に移行していた。脳室壁と嚢胞壁は強く癒着していたため、嚢胞壁の摘出は biopsy にとどめた。最終的に腫瘍の実質部分はほぼ全摘出でき、内側下方に Galen 大静脈が露出した。病理組織検査で腫瘍は ependymoma と診断され、MRI で増強効果のなかった嚢胞壁にも腫瘍細胞がわずかながら存在していた。